
舞台袖で嗤いましょう

紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

舞台袖で嗤いましょう

【コード】

N6066T

【作者名】

紫

【あらすじ】

理不尽で性格の悪いネギ妹の転生主人公が、ネギアンチでネギに転生した少年をフルボッコにする話です。必読は絶対に読んでください。

必読

必読！

主人公とネギが転生者です。

主人公はネギの双子の妹ですが、ネギの転生者との現代での因果関係はあまりありません。

ネギの転生者はネギアンチですが、絶対に報われません。

主人公とネギアンチの性格が両方理不尽です。

ネギはチートトリップ転生、主人公は転生トリップです。

チートのため、ネギ（転生）は魔法を全て使え、その威力はナギ以上です。

主人公の性格が悪すぎるので、そういったことが嫌いな方は見ない方がいいです。

要するに、理不尽で性格の悪い主人公が理不尽なネギアンチな転生者をめっちゃくちやにする話です。

毒しかありません。

ネギアンチの方は絶対に見ないでください。

ネギアンチの方はもちろん、最後の結末や主人公の性格から、ネギファンの方の閲覧も推奨できません。

1 (前書き)

主人公の名前はミナです。

性格悪すぎる理不尽な女主人公です。

私と私の双子の兄は転生者だ。

……それだけを聞くとわけがわからないと思う。
事実、私もさっぱりだった。

何せ、姉は涙ながらに「ミナ、貴方はあの子とは違つわよね」と言うのだ。

何が、と聞こうとすれば、兄は侮蔑をこめた視線でこちらを見ていた。

その視線は姉ではなく、私に向けられていた。
何故、という言葉は出せなかった。

後で聞けば、「あの子、産声もあげなかったし、勉強ばかりするの。魔法も全部使えて気味が悪いの……」ということらしい。

そして、兄は私に「お前、転生者だろ。この顔に媚びんじゃねえよ、気持ち悪い」と言った。

思わずぼかんとした。

転生者の意味は知らないわけではない。

人並み以上にインターネットにのめり込んでいた私は、もちろん夢小説なるものに興味があつたからだ。

ああ、恋愛とかは好きじゃないわよ？

そうねえ、一番好きなのは

あら、話がずれたわね。

ああ、そうそう、兄の話ね。
私ねえ、聞いちゃったのよ。

兄の話を。

話というのも変ね、独り言なんだから。

こいつは何でこんなに顔だけ恵まれてんだ。

女の子に恵まれてる癖に何も思わない。

女の子を騙して命がけの戦いに巻き込んでいる。

妬ましい、妬ましい。そんな感じ。

それを聞いた時、思わず怖気がはしつたものだわ。

最後の一つはともかく、思いつきり嫉妬じゃないの。

てか、誰に対しての？
と思つたら、兄の名前を聞けば納得だった。

『ネギ・スプリングフィールド』だって！

ああ、『魔法先生ネギま！』かあ、と私は思った。

でも、私は細かいことは全然知らない。

生前、弟に勧められて見たけれど、いまひとつはまれなくてね。

ああ、勘違いしないでね？

別に嫌いなキャラクターがいたとかそんなんじゃないわ。

確かに『ネギ』は顔は端正だし、女の子には恵まれている。

だけど、過去を一言で表すなら『悲惨』だ。

同情するものではあっても、妬むものではないわ。

ああ、思い出したわ。

確か、弟も「ネギってさー、常識ないんだよね」って言ってたわ
ね。

だけどね、この子って確か数えで十でしょう？

両親がいなくて、村が焼かれて……。

そんな過去があるのに、ちゃんと生きている。

まあ、ネギも前だけを向いているわけじゃないけれどね！

そんなの、十じゃ無理よ。

せめて、十五……それでも厳しいくらいね。

そもそも貴方の言う常識って何なのかしらね？

そうそう、そんな奴らに言いたいわね。

「貴方が十歳の時、何をしていたか」って！

人と喧嘩したことはなかった？

人に迷惑をかけたことはなかった？

誰かを泣かせたことはなかった？

プレッシャーのかかることは全部完璧にできた？

……ああ、最後のプレッシャーはネギの教師についての立場ね。

どうせ、学芸会とかそういうレベルでも迷惑かけていたでしょうに！

ああ、私は『ネギ・スプリングフィールド』はそんなに嫌いじゃない。

だけど……『兄』は大っ嫌いだわ。

努力もせずに妬む奴なんて、恥ずかしいだけよ。

鏡でも見て出直してくれば？

1 (後書き)

怖い主人公になりました。

ネギアンチの方は絶対に見ないように言ったから大丈夫だと思いましたが。

努力は才能に勝るとはいうけれども、どうしようもない時もある。

でも、私は才能には多少恵まれていた。

それは生まれつき頭のいいというそういった類のものではなく、次のテスト範囲の時……どれがテスト問題に出るかわかる、というものかしら？

ああ、勘違いしないでね？

あくまでも、『私の立場ならこういう問題を作る』というだけよ。それが笑ってしまうくらい、結構な割合で当たるものだから、クラスでの成績はすこぶるよかったわ。

ずるい？ まあ、そうかもしれないわね。

だけど……言うでしょ？

『お人好しが馬鹿を見る』って。

勝てば官軍なのだから、いくらでもずるくていいじゃない。

それに、持てる才能をどう活用しようと私の自由だわ。

別にカンニングをしているわけじゃないんだし！

そんな感じだから、有名大学からお誘いが来るとか、充実した人生だったわ。

だった……そう、過去形。

当たり前だけど、私も転生者なのよ？

だから、つまり、一度死んでるわけ。

その時、父を置いて母はどこぞの見知らぬ男と駆け落ち。

ドラマチックねえと思うけれども、当然、父は怒り狂った。

その怒りの矛先が母によく似た顔を持つ私にいくのに、そうそう時間はかからなかったわ。

私は急遽、行きたかった大学をやめ、父からの暴力に耐えながら高校を卒業した後、一人暮らしを余儀なくされた。

その際に社会で揉まれて揉まれて。

あがいてあがいて。

学生とは比べ物にならない大変さに、私は翻弄されっぱなしだったわね。

結果、過労でぱったり。

数年は頑張ったけれども、駄目だったわねえ。

あ、多分、そのまま死んだんじゃないかしら。

記憶もそこで終わりだしね。

一人暮らしってこういう時に不便よねえ。

それが、前世の私の話。

私が産声を上げたのは、本当に偶然。

「こんな人生、クソくらえよ！」と思って叫び声をあげたら、そのまま産声になったようね。

まあもつとも、兄はそのまま泣くこともなかったようだから、産声だけが原因ってわけじゃないみたいだけどね。

何より、兄は神懸かったとしか言いようのない魔法の腕なのだから、どのみち目立っていたでしょうね。

……それは、才能という言葉で片付けるには、過ぎたものね。

私はふと悪巧みを思いつき、兄に話しかける。

「ねえ、お兄ちゃん。一緒に遊ぼう？」

「うるせえ、どっか行けよ、気持ち悪いよ」

あはは、やっぱりこいつ、私が嫌いみたい！

そうねえ、原作にもネギの双子の妹なんていなかった。

だから、私が転生者って思っているのね。

間違ってないけど……貴方、わかってる？

ネカネ姉さんがこつちを見ているの。

……もうひと押しいるかしら……？

「お兄ちゃん、私ね、勉強、頑張るよ。だから……」
「うるせえって言うてるだろうが！」

どかつ、と私を殴る鈍い音。

私は体勢を崩し、近くのテーブルに頭をぶつける。
これも計算づくだ。

殴っただけだとまだ生ぬるい。

少はずつ……追い詰めなきゃねえ。

……だけど……うわあ、痛い。

予想以上の痛みね、と思いながら、私は馬鹿なこの兄を嘲笑った。

「ネギ！ ミナが何をしたっていつの！」

ネカネ姉さんが私を助け起こしながら言う。

「大丈夫？」と、治癒魔法もかけてくれる。

「ありがとう、ごめんね……」と私は力なく言う。

確かに、この場合どう見ても悪いのは兄だ。

私は、『年相応』に兄に甘えただけである。

まあ、私の本当の年齢を見れば気持ち悪いけれどねえ。

「だけど、この兄、数ある転生者の中でもとびつきり頭が悪いらしい。」

でもまあさすがに、「こいつも転生者だ」というわけにはいかなかったらしく、血走った眼で「ごめん」と言ってきたわ。

あはは、酷い顔。

せっかくの貴方の嫌いな端正な顔が台無しよ？

「ネギに何かされたら言うのよ？」

「あの馬鹿ネギ、女の子に手を上げるなんてどういふことよ！」

ああ、ありがとう、ネカネ姉さん、アーニヤちゃん。

私は元気よ心配しないで、と、少女は困った顔をしながら心の中では笑みを浮かべていた。

2 (後書き)

才能について。

これは多少とはいえどあることです。

私の友人は「ここテストに出そう」と言ったところがほとんど当たってましたので。

前世について。

暴力を振るわれましたが、何とか卒業までもちました。

傷痕ありません。

産声について。

これ、転生ネギは声を何も上げなかったら産声にならなかったんですよね。

だから本当は、何でも声を発したら産声になっていたという。

治癒魔法について。

ネカネさんが魔法使えなかったらすみません。

原作開始から六年前……。

あらあら、月日は無情に流れるものねえ、と私は思った。

飛び交うのは魔法の矢、そして、悪魔の群れ。

どうやら、運命の日がやってきたようである。

私の兄はというと、前線で戦っている。

悪魔の群れをいとも簡単に駆逐していくが、なにしろ、相手も数が多い。

なかなか減る様子は見えず、兄もまたそろそろ疲れているようだ。

そんな時、兄に一体の悪魔が襲い掛かる。

それを庇う、スタンさんとネカネ姉さん。

……ネカネ姉さん、ちゃんと兄を庇うのね。

優しいいわねえ、と思いつながら、私は陰から様子を窺う。

スタンさんが悪魔を封印したが、他の悪魔が兄へと襲い掛かる。

兄は対応を誤ったのか、咄嗟の隙が生まれた。

ここだ、と私は思った。

え？ 兄を攻撃する？

やあねえ、そんなことするわけないじゃない。

私は必死に覚えた魔法の矢を、兄を狙っていた『悪魔に』ぶつける。

そして、悪魔と兄の間に立ち、兄を『庇った』。

その瞬間駆けつけたのは、我らのお父様、ナギ・スプリングフィールドだ。

おそらく、原作通りにことが進んでいるのだろう。
ナギはあっという間に悪魔を蹴散らしていった。

こちらにやって来るナギ。

その表情はよく見えないが、何となく後悔しているような気がした。

「すまない……来るのが遅すぎた……」

ああ、やっぱり。

貴方は後悔しているのね。

兄は、冷たい表情でナギを睨みつけている。
だが、私は

「父さんっ！」

「……………ミナ、か…………？」

「はい……………わたし、私……………うつつ……………！」

ナギに抱きつき、そのまま泣いてやる。

……………あら、全部演技じゃないわよ？

あんな悪魔の群れ、本当に怖かったのだもの。

それにわざわざここに出てきたのは、もちろんわけがある。

「よく頑張ったな。お前がネギを庇ったところ、ちゃんと見ていたぞ」

ええ、これが狙いよ。

兄は予想通り、凄まじい形相でこちらを見ている。

「そんな……………お兄ちゃんは他の悪魔をどんどん倒していったわ……………」

……………私なんて、足手まといでしかないもの……………」

「そんなことはない！ ミナ、よくやった……………ネギ……………お前も強くなったな……………」

けど、とナギは一拍置き、続けた。

「妹を……………ミナをちゃんと守ってくれよ？」

ああ、唾つてしまいそう。

こんなに上手くいくなんて！

ああ、確かにナギは魔法使いとして優秀だわ。

だけど、あまりにも人間の心を知らなさすぎる。

あくまでも、『今日の前で兄を助けた妹』を褒めて、それまで勝手に頑張っていた兄はおざなりにする。

馬鹿ねえ。

まあ、兄も『ネギ』と違ってナギのことが嫌いだろうけど！

兄は激昂したようにこちらを見ている。

「おにい、ちゃん……私、役に立てなかった……？」

そう、おそろおそろ言う。

この仕草も、転生者とわかっている兄にとってはうざいものではないだろう。

「……………っ！」

そう言つと、案の定、兄の顔がどんどん鬼のような形相になっていった。

さあて、そろそろ頃合いね。

「……………そう、だよね……………お兄ちゃん、私のこと嫌いなもの、知ってるよ……………？」

でも、私……………私ね……………」

「うるせえっ！！ お前なんか死んじまえ！」

あはは、本当に予想通り過ぎて張り合いがないわ！

こうやってもだもだすれば、絶対にそう言つと思つた！

ナギはそれを聞くなり、厳しい表情になる。

それを察したのか、兄はさっさと逃げていってしまった。

馬鹿ねえ、せっかくここまでこのイベントをこなしたんだから、杖くらいもらっけていきなさいよ。

杖？ ああ、私がもらったわよ。ありがたく使わせてもらっわね、お父様！

3 (後書き)

疲れる兄の様子。

いくらチート設定があっても、いきなり百戦錬磨になるわけじゃないんですよね。

だから、襲い来る大群に辟易して疲れるんです。

ナギでさえあの悪魔の大群の討伐には時間がかかったように見えるので、ここではもちろん、転生ネギはかかりまくります。

おいしいところを持っていく主人公。

この時、もちろん転生ネギは混乱しまくります。

何せ、殺そう殺そう思っていたのに姿を見せなかった主人公がいきなり自分を庇って(下心大あり)、ナギにも褒められるのですから。

深く考えないナギ。

ナギは、転生ネギがどれくらい強いかは知りません。

ちようど、スタンさんとネカネさんが石化したあたりで来たので、全然知りません。

そしてまた、わかったとしても「あー、さすが俺の子供」くらいです。

ナギとて、天才と呼ばれていますが、威力を磨くくらいの努力はしたはずですから。

でも、「登校地獄」見る限りではそんなことしてなさそうですが。

逃げる兄。

形勢不利と悟るや否や逃げました。

喧嘩して、親が違う兄弟の肩を持つとしたら居心地悪いですよね？

転生者ゆえにダメージは少ないですが、百戦錬磨のナギの怒気に
圧された形です。

4 (前書き)

今回は転生ネギ視点です。

俺は、『魔法先生ネギま！』が大好きだ。

だけど、主人公のネギは大嫌いだ。

本当に、何でこんな奴が……って思う。

だって、こいつ、恵まれてる癖に全然それらしい感じしないし。感謝くらいしろよ。

ああ、むかつくむかつくむかつくむかつくむかつく！

ふう……むかつくんだよな、本当に。

そして、俺は死んだ。

どうやら、神様とやらの手違いらしい。

願い事を叶えてやると言われたから、ネギまの世界へとチート転生してもらおうように言った……。
が。

ネギになるなんて聞いてねえぞ！

何でよりによってこんな奴になるんだよ。

こいつは顔だけ恵まれてる、ただの馬鹿じゃねえか。

女の子に恵まれてる癖に何も思わない、馬鹿じゃねえか

！！！
女の子を騙して命がけの戦いに巻き込んでいる……ただの下衆だ

ムカつくぜ……！！

やばいな、声出ていたかもしれねえ。

まあ、それはそうと……。

わけのわからない奴がいる。

それが、俺……というか、ネギの双子の妹、ミナだ。

俺の知っている限り、ネギに妹はいない。

ってことはこいつも転生者……？

丁度よくミナを見つけたから、言ってやる。

「お前、転生者だろ。この顔に媚びんじゃねえよ、気持ち悪い」

どうせ、この顔が好きなんだろうがよ、売女が……！！

ミナは、何かにつき「お兄ちゃん」って言ってきやがる。

これが、他のネギまの女の子達ならうれしいが、こいつは転生者だ。

もし、ネギまを知っていたなら、こいつが好きなのは俺じゃなく

てネギだ。

そんな胸糞悪いこと、ごめんだな。

辛くあたったときゃいい。

「ねえ、お兄ちゃん。一緒に遊ぼ？」

「うるせえ、どっか行けよ、気持ち悪いよ」

だが、こいつはそれでも懲りなかったらしい。

ああ、うぜえ。

殺してやりてえ。

今の俺の力なら簡単だけど、それをすると俺のネカネがうるさいからやめておいてやる。

「お兄ちゃん、私ね、勉強、頑張るよ。だから……」

「うるせえって言うてるだろうが！」

ああ、うるせえなあ！

そう思うと、俺はそいつを殴っていた。

体勢を崩し、近くのテーブルに頭をぶつけやがった。

ははは、傑作だ！

ざまあみる！

だが……。

「ネギ！ ミナが何をしたっていうの！」

ネカネ！？

何でそいつの味方するんだよ！
そいつは転生者で、お前を騙してるんだぞ！

……っ。

駄目だ、こいつを転生者って言うことはできねえ……。
そんなことしたら、俺が転生者ってばれちまう……。

「ごめん」

何とかその三文字を口にする。

屈辱だぜ……！！

お前なんか、村を焼き払われる日に悪魔と一緒に消してやるよ……！！

その背後で少女が嗤っていたことを、少年は知らない。

そして、ネカネとアーニヤの心が少年から離れたこともまた、気づく由もなかった。

4 (後書き)

断言転生者。

ここでの転生ネギは終始頭が悪い設定です。

ですから、イレギュラーのキャラ＝転生者になっています。

モブとかどうしているんだろう。

とはいえ、主人公の裏側に気づいていても面白そうですが。

最後の転生ネギの予告。

結局、それは叶わぬ夢です。

これは六話にてもっと掘り下げられる予定です。

主人公が嗤った理由。

見事に自分の思い通りに動いちゃってきているからです。

一応、活動報告にて次回作の予告らしきものをしています。

あれから原作はおそらくちゃんと進行し、兄はやはりトップの成績で魔法学校を卒業した。

私の成績？

私はチートじゃなくて普通なもの、せいぜい中の上あたりかしら？
悪目立ちして兄と同じように見られるのはごめんだったし、何より兄が妙なプライドを持っていたから、多少セーブしたわね。

セーブした理由？

だって……自分の方が優れていると『思っている』のに、自分より劣っているものに負けるのって嫌でしょう？
より高い場所から落とした方が壊れやすい……そういうわけ。

あ、それでも、他の子の勉強を見たり、先生にはちゃんと懐いているから兄と違って「よくできた子」って言われているわ。

何せ兄は先生にもたてつく、他の子とは喧嘩しない方が珍しい、一度なんて死なせかけたことがあったものね。
その子は私が助けたけれど。

あはは！ 成績でいえば、私は兄の足元にも及ばないのにね！
その時の兄の顔ってきたらおかしかったわねえ。

そして、課題だけど、兄は原作通り教師をすること、そして私は……。

中学校の生徒になること、だ。

それも、麻帆良学園の生徒だ。

おそらく、兄のクラスねえ、と想像していたら、先生にもそう言われた。

やっぱり、麻帆良って相当大事なところのようね。

「何でお前がついてくんだよ」

「え……迷惑だった？」

一応、私は兄と共に行動している。

これには、もちろん理由がある。

そつおすおすと言えは、かっときたようだ。

「迷惑どころじゃねえよ！ 今すぐ死ね！」

「ちょっと、あんた！？ そこまで言うことないじゃない！」

その声は私じゃない。

……神楽坂明日菜。

ネギまのメインヒロインの一人だ。

見れば、このかも眉間に皺をよせて兄を睨んでいる。

「なあ、君……言いすぎちゃうん？」

「……………な、何で……………」

兄は解せないといった顔だ。

でもまあ、これもまた一般的にいえば兄が悪い。

周囲から見れば、いきなり兄が怒り狂って妹に罵声を飛ばしたんだものね。

あはは、ちょっとは周りも考えなさいよ。

学習しない奴ねえ。

「きりーつ、礼！ 着席！」

そして、私は麻帆良学園中等部二年A組に無事、溶け込むことができた。

人付き合いは大事なものねえ、朝倉さんと談笑しながら、私は心の内で思う。

兄？ ああ、そんなのもいたわね。

神楽坂さんや近衛さんがクラスメイトに今朝のことを言ったからデビュー失敗で散々らしいわよ。

……………そして……………あのイベントもそろそろかしら？

せつかくだもの、ちゃんと絶望を味わってもらわなくちゃ。

だから……あの子も私が助けようか。

貴方にあげるものなんて何もないわよ、お兄ちゃん？

「だ、だいじょうぶですか……？」

「はい、大丈夫です」

保健室。

私と宮崎のどかさんはここにいた。

『私』の治療も終え、今から帰るところである。

やはりというべきか、あの後、宮崎さんは階段から落ちた。

本来なら、そこで『ネギ』が助けるのだが、兄は杖を持っていない。

だから、私が助けた。

……彼女の下敷きになつて。

あら、魔法なんて使わないわよ？

あくまでも『人を助ける』だって、魔法がばれないこと前提でし

よ？

だからこそ、超さんだつてあんなことをしたわけだし。

種を明かせば簡単。

『瞬動』で彼女の落下地点まで行き、彼女を身体で受け止めたのだ。

……まあ、魔力強化すれば受け止められたけれども（宮崎さんは華奢だし）、それで格闘技の達人だとかあーだこーだ言われるのは嫌だったから、致命的な怪我をしないレベルで魔力強化したわね。

さすがに、無傷でいよなんて虫がよすぎるわねえ。

「大丈夫……？ ミナちゃん……」

「平気ですよ！ 宮崎さんが無事でよかったです！」

そう言つと、宮崎さんははにかんで、こう続けた。

「あの……敬語、じゃなくて……その、普通でいいです……ミナちゃん」

「……いいんですか……？ じゃなくて、いいの……？」

「はい……じゃなくて、うん……！」

「ふふ、よろしくね、宮崎さん。お互い、敬語なしでいこうね！」

「えっと、のどかで、いいよ……？」

「本当！ ありがとう、のどかちゃん」

そういった他愛もない会話を、彼女とする。

ちなみに、私が宮崎さん……のどかちゃんを助けた後、兄は汚物でも見るような目で怪我をした私を見てから去って行ったわ。

当然、のどかちゃんも不快感を覚えたようだけれども、兄は全然気づいていなかったわね。

ああ、滑稽！

あの兄は自らで自らの首を絞めていることにまだ気づかないのだ！

5 (後書き)

魔力強化について。

ちゃんとしています。

ただ、無傷ではないくらいの絶妙な加減をしています。

本来は無理かもしれませんが、敢えてセーブしているということ
で。

兄の発動体。

ありますが、もちろんエヴァの指輪ではありません。

エヴァとも会っていない上、友好関係を築いていないので、
適当に発動体は手に入れていません。

タメ語を、元は敬語　タメ語に。

ご指摘をいただいたので、変更しました。

ご指摘、ありがとうございます。

6 (前書き)

今回は転生ネギ視点です。

あいつは全然よくわからない。

そう、『俺』の妹、ミナ・スプリングフィールドだ。

何なんだよ、こいつ。

普段俺にくつついて回る、鬱陶しい存在。

俺が村の襲撃の時に命懸けで戦っていても、姿を現そうとすらし
ねえ！

ああ、むかつく！

だから、そいつの姿を見つけるなりぶっ殺してやろうと思った。

ここまで我慢したんだ、それくらいのがままは許されるだろう。

……だが、そいつは俺を庇ったんだ！

庇ったといつても身を呈してとかじゃない。

あくまでも『庇った』という事実が残るだけの、軽い庇い方。

何だよ、わけわかんねえよ、と思っていたら、その理由は意外に
も早くわかった。

……そう、自称父のナギが理由だ。

え、何故自称かつて？

あんなどこほつつき歩いているかどうかわかんねえ奴が俺の親のわけねえだろうが。

まあ、顔のよさだけは恵んでくれたけど？

何せ、ナギの野郎、子供ほつたらかしたったんだぜ？

しかも、フェイトやデュナミスのような厄介な奴はそのまま！

役に立たねえ野郎だぜ、つたくよお。

まあ、フェイトの部下の女の子達は欲しいけどなあ……。

かわいいよな、あの子達……。

それはそうと……。

何なんだよ、この光景！

見れば、転生者（これは絶対に揺るがない、あいつは転生者だ）の妹が、ナギに泣きついている。

気持ちわり。

だが、次の瞬間、俺は生涯感じたことのない怒りにかられることになる。

「そんなことはない！ ミナ、よくやった………ネギ……お前も強くなつたな………」

俺はついやかよ！

今まで散々戦ったのは誰だと思ってんだ！

こいつはどこかに隠れてただけだぞ！

ネカネのことも無視してな！

普段あんなに俺を差し置いてネカネと仲良くしているくせによ！

そして、ナギはとどめの一言を言い放ってくれた。

「けど……妹を……ミナをちゃんと守ってくれよ？」

ふざけんなふざけんなふざけんなふざけんな！

声を大にして叫びてえ！

あるいは跡形も残らねえような魔法でこいつらぶっ殺してやりてえ！

………はあ。

駄目だ……！

そんなことをしたら、あの杖がもらえなくなっちまう。

あの杖は何だかんだいっても優秀な発動体だ。

初心者用の杖じゃ全然満足できねえ……！

ああ、けど、プライベート用の発動体ならさっさともらった。

適当な魔法教師に、目の前に魔法見せつけて「それくれ」って言っただけなんだよなあ。

何だ、意外といい奴いるじゃんか。

それはそうと……。

何だ、この光景は……！？

「おにい、ちゃん……私、役に立てなかった……？」

そう、おそろおそろ言ってきたがる。

ああ媚びるような仕草すんじゃないやねえよ気持ち悪い気持ち悪い！！

うぜえうぜえうぜえ！

「……………っ！」

もう、殺していいよな、こいつ……！

……いや、駄目だ……！

せめて発動体もらってから……！！

「……………そう、だよな……お兄ちゃん、私のこと嫌いな、知ってるよ……？」

でも、私……………私ね……………」

「うるせえっ！！ お前なんか死んじまえ！」

その瞬間、ナギは厳しい表情になる。

え、何でだよ？

悪いのはそいつだろ！？

……………くっ、駄目だ……………！

これじゃ杖もらうどころか、何ひとつ親らしいことをしていないクソ親に説教される……………！

うん、逃げるか。

発動体なんていくらでもある。

それに、よく考えればこの俺のチート能力があれば、杖なんてどうだっていい。

ああ、くそ。

あいつ、殺してやりてえ。

どうあがいても元社会人である女性に、元学生である少年が敵うはずなんてなかった。

6 (後書き)

転生者と確信している理由。

ぶっちゃけ、本編にはいないからという理由だけです。

オリジナルキャラが紛れ込んでいるとかは思いません。

自分から来たから、違う要素が加わったとか考えもしません。

プライベート用の発動体。

魔法教師から魔法で脅迫して奪い取りました。

が、本人に自覚はありません。

そのため、魔法学校での噂は最悪を極めています。

社会人と学生。

これは正直、越えられない壁だと思います。

どうあっても学生は社会人の大変さは理解できないと思います。

学生でのミスは謝れば済みますが、社会人のミスはクビにつながる

ものもあり、何十万という損失が出ることもあります。

学生なりに大変なのはわかりますが、社会人の大変さはもっと大変です。

大変じゃない仕事に就ければ、ものすごく幸福です。

兄は歓迎されていないので、歓迎会は誰もしない。
ちなみに、教師の受けもよくない。

はつきり言ってしまうばものすごく悪かった。

魔法先生じゃない教師には見下しまくり、他の魔法先生にもものすごくえらそう、学園長にのみ敬語は使うが、透けて見える傲慢さ。
……何か恨みでもあるのかしらねえ？

歓迎会がないのも、まあそりゃそうよねえ、私は思った。

椎名さんが普段なら歓迎会するんだけど、あの噂じゃなあ、と少し哀しそうな表情になる。

私もそれに合わせて「ごめんね、私のお兄ちゃんが」と言ってみる。

すると、神楽坂さんと近衛さんが「そんなことないわよ！」と言ってくれた。

ありがたいわねえ、やっぱり持つべきものは友人かしら？

ちなみに、兄のデビューは本当に散々なものだった。

愛想は悪い、すぐ怒る、授業はわかりにくい、ちなみに罵は軽かわしたが、その後で「大人をからかうな！」と、怒鳴りまくる…

…。
それには思わず口をあんどり開けてしまいそうになったわ！

まあ、確かに子供のいたずらにはいきすぎているけれど、大人の余裕つてのも見せなさいな。

貴方も転生者でしょうに。

っていうか、それ以前に鏡見なさいよ。

今の貴方はどう見ても子供よ？

そして何やら、騒がしい。

女子高生アタックとか聞こえてくる。

頭悪そうねえ、と私は思ったが、表には出さない。

兄は来ないだろう。

一瞬、遠巻きに見てただけで、「ふんっ」とか言ってから去って行ったわ。

……校内での揉めごとを収めるのも教師の仕事でしょうに……。わかつているのかしら、あの兄。

委員長さんと神楽坂さんがお馬鹿高校生にボールをぶつけようと
するけど、私はそれを制する。

仕方がないわねえ、相手も鬱陶しいし、兄も役に立たないから、言
いくるめましょうね。

「あの、先輩方……?」

そして、おずおずと切り出す。

「何? 貴方小さいわね」

その言葉に、笑いかけた。

あらあら、危ない危ない。

本性を出すなんて下の下がすることよね。

「はい、飛び級でここにきたので……」

「ふうん、その天才さんが何の用なの?」

あ、こいつ微妙に対抗意識燃やしてる。

飛び級だからかしら?

おとなげないわねえ、と心の中で嘲笑う。

「いえ、私が天才なんて畏れ多いです。私は貴方がたのような女性を尊敬いたしますわ」

「……え……そう? ふふ、やっぱりそうよね!」

「そうです。貴方がたのような御人は、このような泥くさいことをするなんてもつたいないです!

もっと貴方がたの美しさを活かすことがあるはずですわ?

こんなことをしていたら、貴方がたの美しい肌に傷でもついたら、世界の損失ですわ……」

相手の耳元で、相手に聞こえるだけの声量で、おだてる。

おだてること それは社会に出ていれば、ある程度自然に身につくもの。

そして、女性は化粧や肌、おしゃれにはとても気を使うもの。
そう言っただけで、リーダー格の女は得意そうに髪をさらりとな
びかせながら言う。

「そ、そうね……私達だったら中学生のガキ相手に何をムキになっ
ていたのかしら……！
さっさと戻りましょう！」

貴方達、運がよかったわね！」

そう言って去って行く高校生の方々。
これなら、もう一度来るなんてことはないだろう。

……この時私はもう一度来るのが史実なんて思ってなかったけ
れども！

高校生の方々が去ってから、やはり気まずい沈黙が落ちる。
そりゃあそうよねえ、貴方達の視線じゃいきなり向こうが去って
行ったのだから。

でも、私は非力だから？
あまりいい案って思いつかなくてねえ。

「あのっ、ごめんね、ごめん、ね……！
何だか怖くて、自分でも何言ってるか……わからなくて……！」

先手必勝。
相手がよほどのへそ曲がりでもない限り、先に泣いたもの勝ちな
のだ。

無論、これは相手が学生の場合である。

社会人ではこうはいかない。

「だ、大丈夫!? ミナはよくやったわよ! 保健室行く?」
「う、ううん、いい……皆に迷惑、かけられないもの……」

ああ、ありがとう、神楽坂さん。

貴方は純粹で真っ直ぐな人だから、そう言ってくれと思ったわ。
というか、怪我なんてしてないし、精神も安定しまくっているけれどね?

私は力なく「ありがとう」と言いながら神楽坂さんの手を取り、
眉根を下げて微笑んだ。

この一件で、私は「気弱だけれど仲間のためなら勇敢に相手に立ち向かう」と言われ、さらに二年A組の生徒との絆を確かなものにしたのだった。

え、兄?

性格も頭も悪いのにハーレムなんてできるわけないでしょ?
女を舐めてるのかしら?

7（後書き）

傲慢な兄。

魔法先生は、まともです。

というより、大人を舐めるなという。

実力ある大人ができないことを、力はあっても頭の悪い子供にできるわけないでしょ、という話です。

そして、魔法先生「悪だと決めつけています。

そのせいや魔法学校での素行を含め、魔法関係者にはめっちゃくちゃに嫌われています。

また、本人の態度の問題もあり、普通の人間にもものすごく嫌われています。

へりくだる主人公。

謙遜も時には必要です。

主人公の立場から、相手を言い負かすことは得策ではないと考え、おだてて引いてもらうようにしました。

相手をおだてていい気にさせて自分のペースに巻き込むのも立派な策略です。

先に泣いたもの勝ち。

よくあることだと思えます。

少なくとも、私の周囲ではよくありました。

女を舐めた行為。

そのまま言葉のとおりです。

実際はハーレムなんて簡単にはできません。

女は炎……遊びで近づくと火傷する、ということなんです。

8 (前書き)

今回は転生ネギ視点です。

何だよ、あいつ。

わけわかんねえよ。

ことあるごとに俺にくつついていたくせに、今度は高畑とか学園長にべつたりだ。

「高畑先生！ いつも御苦労さまです！」

「学園長、ちゃんと体調管理できてますか？ オーバーワークは身体に毒ですよ？」

「式集院先生！ 超包子、一緒に行きませんか？」

「ガンドルフィーニ先生、私が大人になったら一緒にお酒飲みましょうね！ え？ お酒駄目？ そんなあ……」

「刀子先生つて本当にお強いんですね！ 私もいつか先生のような刀剣の使い手になりたいです！」

「シャークティ先生のお祈り、美しいです！ 様になるのって難しいですよね……」

前言撤回。

教師全員にべつたりだ。

何なんだよ、こいつ！

別人……つてわけじゃねえ。
相手の好みのタイプにころころ変わってやがんだ……！
本当に気持ちわりいな。

そして、テストの件がやってきた。
やはり、期末試験でこのクラスを最下位脱出じゃないとだめらしい。

ああ、面倒くせえ！
けど、まだハーレムの夢が……！

ここで挽回すれば、まだ俺にも光があるはず……！！

なのに……何だ、この光景は！
俺が教室に入ったことは誰も気づいていない！！
見れば、皆、勉強している……？
何故だ！
俺はまだ何も言っていないぞ！？

「あ、おにいちゃ……じゃなかった、先生！

私達、一度本気で勉強して、最下位から脱出することにしたんです
」！

「そうそう、ミナがあんたに見下されているのは成績悪いからじやとか言うからさ、だから何とかしようとしたわけ」

「これで、先生に目にモノ見せるですーっ！」

「いえーいつ！」

アスナ、双子が次々と言う……。

おい、これは悪夢だよな？

お、俺は見下してなんか……ねえぞ？

俺のハーレムが……。

俺の夢が……こんな女のせいで……！！

俺は耐え切れず、その場から逃げだした。

「お兄ちゃんっ!？」

認識障害結界は頭悪くするんだ！

だからあいつの本性にも気づかない、パーな奴が多いんだよ！

俺のその言葉が口からこぼれていたことを、俺は知らない。

認識障害結界が頭を悪くしてるですって？

そんな人道に反することだったら「人を助ける」ことに反してるでしよ？

何馬鹿なことを言ってるのこいつ、と少女は少年を見下したが、誰にもそれに気づかなかった。

8 (後書き)

ころころと相手好みに。

社会人であれば割と身につく技術です。

私は全然無理でしたが、主人公は世渡り上手でした。

認識障害結界。

私はあくまでもそこまでの効果はないと考えています。

人道的にどうかと思いますし。

あくまでも、魔法に対しての認識に「奇跡」すませる程度かな、
と思います。

あくまでも個人的にです、念のため。

「パー」発言。

他の人に聞かれていたことを、転生ネギは気にしていません。

彼にとって、モブは取るに足らない存在だからです。

それによってさらに評判が落ち込んでいます。

追記：私生活により感想の返信が困難になったので、感想の受付
を停止します。ご了承ください。

ふふ、あれからは特に何事もなく進んでいるわ。
ああ、途中で長谷川さんを慰めたり、桜通りの吸血鬼事件があつたりしたけれど。

でもまあ、私に害がなければ関係ないもの。

その間にも、私は色々なことを思い出した。

生前も記憶力はよかったからねえ。

『完全なる世界』だとか、フェイトだとかテルティウムだとか弟はよく言っていたわね。

あとは、魔法世界が幻だとか。

重要そうなピースはそのあたりかしら？

我ながらなかなかの記憶力ね。

だけど、それにおぼれることはしちや駄目よ。

あくまでも、私の目的は

大規模な停電があるらしい。

そして、その先のイベントも私は知っていた。

あら、思い出しただけじゃないわよ？

あの、エヴァンジェリンさんが私に言ってきたの。

今日がぼーやの命日だ。妹のお前には悪いが、こちらはこち
らでやらせてもらっぞ。

あらあら、好きにしてくださいな。

そんな内心は隠しながら、ただただ私はおろおろするのみ。

エヴァンジェリンさんはそんな私を鼻で笑って去って行った。

まったく、本当にあの人、数百年も生きたのかしら。

とても感情制御とかできてなさそうなんだけど……年食いすぎて
逆に制御できなくなったのかしらね？

あら、それを気取られるようなことはしないわよ？

私はそれほど甘くないもの。

そして、何やら轟音が聞こえてくる。

それにしても……あの小動物はいないのかしら？

確かカモだとか言っていたあの小動物。

でも、あの兄の性格じゃあ、見た瞬間に殺してそうね。

あの小動物、トラブルメーカーだし。

兄もやたらと強いから、仮契約は必要ないと思ったのかしら？

でも、仮契約ってキスでしょう？

あの兄が忘れてしているわけではないと思うのだけど。

忘れていたら本物の大馬鹿ね。今でも馬鹿だけど。

ところで、仮契約には確かあの小動物の力がいったと思ったのだけれど……。

さすがの兄もそこまで考えてないことないわねえ。

もしそこまで考えてないなら、表彰ものの大馬鹿ね。

自分ひとりでできることなんて無理あるでしょうに。

だって、あのお父様だって仲間がいたのだから。

隠れて、戦いの様子を見る。

村の時の襲撃のときといい、どうやら私は隠れることが上手のようだ。

これって魔法使いっていうより忍者ねえ、と私は思った。

「貴様あ！ 茶々丸を……よくもおっ！……」

見れば、茶々丸さんの残骸が落ちてくる。

どつやら、兄と茶々丸さん、エヴァンジェリンさんは戦っていたよつだ。

……あらあら、あの兄がごめんなさい、茶々丸さん。そう心の内で謝っておく。

そして、兄は見事に地雷を踏んでくれる。

「たかがガラクタだろうが。死んだじゃねえ、俺はガラクタをスクラップにただけだ」

ああ！ 何たる傲慢！

気づかないのだろうか！

今、目の前にいるのがかつて恐れられた闇の福音だということを！
闇の福音がどれだけ腕自慢の魔法使いを葬ってきたかどうかを！

「殺す………絶対に殺してやるぞ！ ネギ・スプリングフィールド！！」

そう言って、呪文詠唱に入るエヴァンジェリンさん。

同時に兄も呪文詠唱に入るが、様子がおかしい。

あら、焦っているのね。

エヴァンジェリンさんの呪文詠唱の早さを。

当然じゃない。

エヴァンジェリンさんはまさに百戦錬磨。

当然、呪文詠唱の早さもさぞ磨きがかかっただろう。

ただただ力だけを授かって生まれた貴方とは訳が違うのよ、お兄ちゃん。

さて、そろそろかしら……？

念には念を、お兄ちゃんもそろそろ詠唱終わってしまうからね。

「お、お兄ちゃん！！」

「……な！？」

私は物陰から飛び出し、魔法の矢を構えながら、兄の名前を呼んだ。

さて、ここで問題です。

普段から辛く当たっている妹が魔法の矢を構えながら兄の名前を呼びました。

この時、彼は何を思っでしょう？

答えは、

「お、俺を撃つ気なのか！？ ミナー！！」

あはは、そうなるわよねえ。

エヴァンジェリンさんはそれを鼻で笑った後、兄と私めがけて魔法を繰り出した。

ああ、細かい魔法の名前は聞かないでね？

『瞬動』で逃げるのに必死で全然聞き取れなかったから。

エヴァンジェリンさんは、私の予想通り、自分をめがけて魔法の矢を構えたと思っていた。

だから、私をも巻き込んだ。

しかし、エヴァンジェリンさんは女子供を殺さないという。

それは、「悪党にしては珍しいわねえ」と思ったからよく覚えていた事柄の一つだったから間違いない。

それなのに兄に対して情け容赦の欠片もなかったのは、茶々丸さんを『殺して』、なおかつそれを嘲ったことだろう。

まあ、私が無事だったのはちゃんと加減してくれたからなのか、兄を第一目的にしていたからかまではわからないけれど！

結果、兄は氷に閉ざされた。

死んではいけないかもしれないけれど、そう簡単に再起はできないだろう。

馬鹿ねえ、火薬の傍で火遊ぶなんかするからよ。

「お前もなかなかの悪だな、ミナ・スプリングフィールド。気に入った」

「よろしいのかしら？ 兄に手を出したと聞かされると、処罰があると思いますわよ？」

「……………構わん。茶々丸を侮辱したのだ…………その痛みに耐えるくらいなら、処罰などぬるい以外の何物でもないわ!!」

あら、見抜かれてる。さすがにそのあたりは年の功というやつかしら？

そして、どうやらこの人物、思った以上に情がある。

それなのに、悪の大魔法使いなんて…………世の中って不思議なものねえ。

貴方は世紀の魔法使いを敵に回した時点で終わっていたのよ、お兄ちゃん？

さよなら、ハーレム生活！

生徒を『殺そう』として、無事で済むとは思わないでね？

脳筋だけじゃままならないわねえ、本当。

あ、そういえば、ここまで大事件になったのだから事後処理とかありそうねえ。

でも、安心してね？ お兄ちゃん。

ちゃ〜んと私が『証言』するから……………ね？

9 (後書き)

色々と思いだす主人公。

何かそれに関連づけられるものに触れた時、そのことを思い出す
ってありません？

……なかつたらごめんなさい、ご都合主義です。どうしても必要
になったので。

また、主人公にとってどうでもいいことはスルーしています。

火薬の傍で火遊び。

思いつきりそうだったのだと思います。

エヴァは強いと思うので……本当に。

閉幕（前書き）

今回で最終回です。

閉幕

閉幕

兄は重傷を負った。

生きているのが奇跡的らしい。

エヴァンジェリンさんはその後、先生方に呼び出された。

私も証人として呼び出されたわ。

エヴァンジェリンさんは、おそらく涙をこらえながら、うつむい

て何かの破片を学園長先生に渡した。

……おそらく、茶々丸さんのメモリーなのだろう。

「……これを聞けばわかるぞ、爺。あいつが何をしたかかな!!」

『お前ら、俺を挑発して無事に済むと思っなよ』

あらあら、そんなことも言っていたの。

本当に救えない男ねえ。

『たかがガラクタだろうが。死んだじゃねえ、俺はガラクタをス

クラブにただただだ』

その言葉に、他の魔法先生達も顔を顰めた。

他の魔法先生に同行していた葉加瀬さんに至っては涙目だった。

……何らかの関係があるのね、茶々丸さんと。

だけど、問題……にならない問題はその後。

『お、俺を撃つ気なのか！？ ミナ！！』

その言葉に、いつせいにこちらを見る魔法先生達。

私はそれに身を震わせた。

そう、これは演技じゃ駄目なの。

「どういうことだい？ ミナ……」

高畑先生は私に訊く。

だが、その声色に責める色はないのは人徳だろうか。

「私は……お兄ちゃんを何とかしたかったの……！」

そう言って、目を伏せる。

すると、魔法先生達も目を伏せ、中には私の頭を撫でてくれる先生もいた。

思い通りことが進んでいるようね。

どうやら、私の予想通り、『兄を助けるためにエヴァンジェリンに魔法を撃とうとしたが、普段から態度の悪い兄はそれを自分に向けられていると勘違いした』と思われたみたいね。

別に間違ったことは言っていないわよ？

兄を『何とか』したかったことは本当だし？

だけどこれ、正直言って私の本意に気づいていても私を有罪にするのは難しいわよ？

現代に例えるなら、『普段から喧嘩している人間と犯罪者が対面している時に、ハサミを持って出てきた』といえばわかりやすいかしら？

私はハサミを持っていただけ。

何も「刺すぞ」「も」「殺すぞ」「も」も言っていないもの。

ただハサミを持っていただけなのに、普段から喧嘩している人間は「自分を刺すつもりか」と言ったというわけ。

まあ、現代と照らし合わせるのは無理があるけれど、だいたいそんなところね。

「とはいえ、ネギ君に重傷を負わせたのは間違いない。

エヴァンジェリンは今後一切の吸血活動を禁じる！

禁を破れば、その時は処刑されることを肝に銘じよ！」

学園長先生の言葉に、エヴァンジェリンさんは、そっぽを向く。

「……………あと、ミナ君。君にも話がある。他の先生方は戻っている

ぞい」

そういう学園長先生の瞳は鋭い。

……あら。

どつやらこれは……………。

ふふっ、読心術？

「……………！！」

どつやら、当たりのようね。

原作のネギが使えるからもしかしてと思ったけれども……………。
でも、これでもなお、私の優位は揺るがないわ。

「ミナ君……………お主は何者じゃ？

完全なる世界、果てはテルティウムのことまで知っておる……………。

ありえんことじゃが、お主の世界は農らの行動をトレースする能力者がいるようじゃの？」

間違いではない。

ただ、いうならば……………その『能力者』は、ペン先一つで彼らの運命を決定できるのだ。

それこそ、『神』と『塵』の違いくらいの力の差がある。

私は息を呑む。

「つまり、お主も故郷へと帰ってもらおう。心配せずとも、ネギ君と違って謹慎処分もなければ見張りもつかん……帰りなさい」

僕は疲れた、と言って学園長先生は椅子の背もたれに背中を預けた。

私は沈んだ声で「失礼しました」と言って、部屋を後にした

あは……あははははっ！！

滑稽！

本当に滑稽だわ！

あのお爺様、本当に私がマギステル・マギを目指しているとでも思っているのかしら！

私が息を呑んだのは、驚くほど自分の思うどおりにしているから！

……もしかして、読心術、私と一対一になった時は使ってなかったのかしら？

まあ、使っていたとしても、悪事もしていない人の心を覗く方が

よほど悪趣味だから安易に表面に出すわけにはいかないでしょうけどね！

ばれていようといまいと、どちらでもいいわ。

だって、殺意や悪意はあっても実行しない人間を処罰することはできないものね？

そうそう、私にとって、むしろ強制送還は都合がよかったの。

何せ私は、まったくマギステル・マギになるつもりなんてないのだから！

私は皆の望む英雄になんてなれないしなりたくもないのだから！

数日後、私と兄は故郷へと戻った。

クラスメイトは多かれ少なかれ私との別れを惜しんでくれたけれど、私の兄のことも手伝って、あまり話題にすることはなかったわ。

あ、そうそう、ナギの杖は返そうと思ったけれども、ナギの仲間のアルビレオさんにとっておいたらいいですよ、といわれたのでとっておくことにした。

その後の麻帆良のこと？

修学旅行？ 学園祭？ 魔法世界？ どうなるうと私には関係ないものだわ。

あ、兄のことはどうだった？

やあねえ、あまりいい話じゃないわよ？

兄の謹慎小屋がいきなり発火したんですって。
何でも、外部から魔法の矢か何かを大量に撃たれたそうよ。
本当に人づきあいつて大事ねえ。

え？ 兄は無事だったか、死んだか？
……そうねえ、貴方の想像に任せるわ。

あら、貴方が泣くことはないのよ、ネギ君？
さあ、一緒に家に帰りましょう？

さあ、私は舞台袖で嗤いましょう。

これにて閉幕、めでたし、めでたし！

少女は赤い髪の少年を連れて、幕が下りた舞台袖で嗤ったのだっ
た。

閉幕（後書き）

ハサミについて。

だいたい、間違っていないかと。

記憶消去について。

そうだった魔法をみだりに使うことは禁止されているということ
で。

ナギの杖について。

他の赤き翼のメンバーから見れば、「父親の形見」の認識でもあ
ります。

それを幼い子供から離すのはかわいそう、だと思ったと。

……ネギについて。

ミナは『兄』と『ネギ』を使い分けしています。

とはいえ、結末は人の数だけ存在する……と置いていてください。

いままでお付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6066t/>

舞台袖で嗤いましょう

2011年6月5日07時06分発行